家春

続立命往生の巻・随想徳川家康

家康

山岡荘八

講談社

徳川家康　第十八巻　続立命往生の巻　随想徳川家康　昭和四十二年四月三十日第一刷発行　著者　山岡荘八　発行者　野間省一　印刷所　凸版印刷株式会社　製本所　藤沢製本株式会社　発行所　株式会社講談社　東京都文京区音羽二ノ一二ノ二一　振替　東京三九三〇　電話東京(九四二)一一一一(大代表)
©山岡荘八　一九六七
定価　六百二十円

徳川家康 18

続立命往生の巻
随想徳川家康

目次

続立命往生の巻

洩る船焼ける家　七

根と花実　一七

越路の雁　二六

江戸の蛙　四七

関東大演習　五九

光りを泳ぐ　七四

最後の正月　八四

発　病　九五
生死の筋目　一〇八
立命往生　一二三
悲願果てなく　一三四
「徳川家康」余話
地に継ごうもの　一四七
その後の忠輝　一六二
日光移葬　一六六
十八年回顧　一七三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

随想徳川家康

無法時代　一八三
国造り人造り　一九一
家康の性格　二〇六
失敗者家康　二一七
家康をめぐる女性　二三八
家康の母と祖母　二四六
戦国人の宗教　二五七
作者の夢　二九三

地球は病む　三〇四
運命の五月八日　三一五
歴史と人間　三二六
徳川家康年譜　（巻末）

装幀　稲垣行一郎
挿画　木下二介
箱裂地　麻地草花人家文様茶屋染
提供　山口勉
表紙金版　徳川家康直筆署名

徳川家康

18

続立命往生の巻

随想徳川家康

続 立命往生の巻

洩る船焼ける家

一

駿府の家康の許へ、九月八日、江戸から前後して二人の使者がやって来た。

その一人の柳生宗矩は使者というより、家康の方から呼んだのだと言った方がよい。

あれこれと、一門の多くの弟子たちから寄せられる全国の情報も知りたかったし、平和の世に処する武道について、宗矩の意見もしっかりと問いただしておきたいと思ったからだ。

ところがもう一人は家康の予期しない使者であった。

表向きは、大坂における旗本たちの戦功を家康に報告し、その行賞についての意見を承りたいという用件で、小姓組番頭の水野忠元がやって来たのだ。

忠元は本多忠純に会い、そのあとで家康の居間へ通されると、すぐさまお人払いを願い出た。

秀忠直々の密旨をおびて来ている時でなければこのお人払いは求めなかった。

駿府の重臣たちまではばかる話……と、なるとおだやかならざる空気が漂う。それを知っているので家康までが眉根を寄せた。

「また、何ぞ厄介なことがあったのか」

(事によると忠輝の処分を相談に来たのかも知れぬ)

家康は、そう思いながら人々を遠ざけると、渋い表情で、忠元に問いかけた。

忠元は平素よりも堅くなっている。

「はい。去る八月二十八日のことでございます」

「二十八日……と、申すと、十日ほど前にあたるの」

「仰せの通り……その二十八日に、伊達政宗どの、突然江戸から姿を消してござりまする」

「忠元！　おかしなことを申すな。政宗が消えた……というのは誰ぞに殺された……という意味ではあるまい」

「はい。江戸屋敷の普請など致し、出来上がったら将軍家をご招待申し上げて猿楽をお目にかけたいと申して居りましたものが、突然に帰国致してござりまする」
「それならば何故帰国したと申さぬのだ。消えたなどとおかしなことを……」
「それが、消えたも同然……と、申しまするのは、その前夜、葛飾に鷹狩りすると突然言い出し、その鷹狩りの途中から、そのまま帰国なされたらしゅうござりまする」
「ほう、鷹狩りの途中からのう?」
「何でもここには獲物が居らぬ。国許の鷹場がよい。そう怒鳴り立てて、そのまま帰国と」
「留守居の者が申したのだな」
「仰せの通りにござりまする」
「届出のあったのは、その翌日か」
「当日の日暮れにござりまする」
「そうか。それならば、或いは、癇の果てかも知れぬ。案ずることはあるまい」
「ところが……実は、上総介忠輝さまも、江戸へ参る筈が、そのまま国許へ直行なされておわします」
「なに、それを、何故先に申さぬのだッ!?」
「前後はお許し願いとう……実は、上総介さまを国許へ帰すよう計ろうたのも伊達どのらしゅうござりまする。そこであらぬ噂が立ちそめました。上総介どの奥方さまご離別のことから伊達どのは腹を立て、双方示し合わせて挙兵の決意を固めたらしいと……」
家康はフフンと鼻を鳴らして苦笑したあとで、しかし真剣な顔になって考えこんだ。

二

「それについて、将軍家ご側近のご意見も、実は二つにわかれて居るかに伺ってござりまする」
水野忠元は、その言葉が不遜にひびかぬよう、かくべつ気を配っているらしかった。
「その一つは、許しがたい公儀の軽視、これを問責せずにはおけぬと致しまする強硬意見。もう一つは、案ずるには及ばぬ、既定の方針どおり、上総介さまご処分を先に仰せ出さるれば、間もなく火は消え失せようという」
しかし家康は眉根に皺を寄せたまま、じっと脇息にのせてある老眼鏡に視線をおとしている。
「上様の仰せでは、伊達どのは、戦国以来、大御所さまかくべつご量肩の戦友でもあることゆえ、われ等だけで事を決するは僭越、ご下問もあらば詳しく事情を奉答申し上げてご意見を仰ぎ参れとの仰せ出されにござりまする」
家康は何を思ったのか、またフフンと鼻を鳴らした。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「困ったものよのう」
「は……？」
「将軍家は政宗に気押されて居る。それではならぬのだが、困ったものよ」
「と、仰せられまするとと、ここでは公儀の重みを見せよ、とのご意見でござりましょうか」
「そうではない。言わいでも、責めいでも、相手が遠慮するようで無うてはならぬと申すことじゃ」
家康は軽く言ってから、
「上総介が女房どもは、引き取ると申したのか」
「はい。いいえ……その話に答えもせず、さっさとご帰国なされましたので」
「そうか。話の仕掛け方が軽すぎたのであろう。将軍家も、苦労が足りぬわ」
「は……」
「総じて人と縁を断とうとする時は、両者の間に誤解や感情のもつれの残らぬよう、別の手当て、別の配慮が大事なものじゃ」
「と、仰せられまするとと？」
「わしは、あれの官位をすすめた。庶長子の秀宗には宇和島十万石を遣わした。これ等はみな、その手当てなのだ。この手当てで敵意のない事をよく示し、そのあとで上総が女房を引き取らす……」
そこまで言ってから思い出したように、
「そうじゃ。仮に、上総が女房は引き取って貰いたい。その代わり、伊達家の後を継ぐ嫡子忠宗には、別に将軍家の娘一人を進ぜて両家は懇親に……そう申したとせば、相手も腹は立てられまいが」
「あの、将軍家ご息女を」
「養女でもよいわな。要は天下の泰平よ」
家康は渋い顔でそう言うと、
「よしよし。一思案してみようほどに、しばらく退って休んで居れ」
あっさりと忠元を退らせて、すぐにこんどは、もう一人謁見を待っている柳生宗矩を呼び入れさせ、
「又右衛門、伊達が短気話を耳にして居るか」
と、問いかけた。
「はい。江戸ではその噂が誇大に伝えられ、中には戦にもなりかねまいなどと……」
「そうか。どうじゃ。そこ許の見透しは？」
「伊達どのの酔狂も、今度はチト度が過ぎましたように存じまする」
「そうか。酔狂と見るか。しかし、瓢箪から駒、のたとえもある。こっちの構えは大上段がよいか、それとも正眼が

よいと思うか」

三

家康の問いかけ方が兵法の構えという、いかにも軽い問いかけ方なので、柳生宗矩も軽く答えた。

「構えは、つねに正眼でなければならぬと存じまするが」

「そうか。正眼でなかったゆえに、度のすぎた酔狂を許してしもうた……そういう意味になるのだな」

「大御所さま、大御所さまは酔狂と酒乱をご区別なされましょうか、それとも同じ類いとご覧なされましょうか」

「フン、おかしな反問をして来たの。すると、伊達政宗は、酔狂ではあるが、酒乱ではないといいたいのか」

「御意にござりまする。あのお方の構えは八方破れ……相手の肝を奪おうと、時々おかしな構えは致しまするが、わが身が何をしているのかもわからぬほどの酒乱とは見えませぬ」

家康は、舌打ちしてからフフンと笑った。

「又右衛門も、大坂以来、だいぶ育って参ったようじゃ。どうじゃな、まだ、将軍家からご加俸を受ける気にはならぬかな」

「はい……それでは、落城の日にこつえんと消えていった奥原豊政に笑われまする」

「奥原ではあるまい。亡くなった石舟斎の眼が怖いのであろう」

「それも、ござりまするが」

「羨やましいわ。石舟斎はよい伜を持ったものよ」

「亡父が、地下で恐縮致して居りましょう」

「実はの、わしがこなたを呼んだのは他でもない。わしもそろそろ天命に甘えてばかりは居れぬ齢じゃ。そこで来春は早々にもう一度京へ参って来ようと思う」

「もう一度京へ……」

「そうじゃ。これで、もうこの道は通るまい。そう思うての、心の中で別れを告げて道中してから三度目じゃ」

「ご用向きは何でござりましょう?」

「それについてこなたに頼みおきたいことがある。こんどの上洛は、三代将軍たるべき、竹千代どのを伴うての参内が目的じゃ」

家康はそこで又、この人にしては珍しく自嘲めいた笑いを洩らした。

「おかしなものよ。わしは、達人と申すものはな、或る年齢に達すると、不動の安心を摑みとれるものじゃと想像していた」

「なるほど」

柳生宗矩は、自分でもギクリとするほど、鋭い眼をして

心耳を澄ました。
「ところが、仲々もってそうではなかった」
「と、仰せられますると……」
「生きれば生きるほどに迷いが深くなるばかりよ。燃え尽きようとする生命の灯を見つめながら、あれに迷い、これに泣き、あれを案じ、これを気遣う……又右衛門、悟りなどという境地はわしには無い。わしは手のつけられぬ鈍根の生まれつきらしいぞ」
「恐れ入りました。われ等には、まだまだそのお言葉の意味すらわかりかねまする」
「わしは考えた……これは進んで迷いに迷うてみるより他にないと。そこで竹千代どのをハッキリとわが家の跡目に決めておこうと慾を出したのだが、この慾をどう思うぞ。わしのいまの心境はな、焼ける家の下に臥し、洩る船に乗って大海を渡っているような気持ちなのじゃ」
そういうと家康は又、泣き出しそうな顔で笑った。

四

「あの、焼ける家の下に臥し、洩る船で大海をわたるお心……？」
柳生宗矩は、このようにまっ正直な述懐を耳にしたことがなかった。
安心は、万人ひとしく望む境地だ。しかし、時々刻々、生成してやまぬ周囲の動きが、果たして絶対の安心などを個人に許すものかどうか？　天地はそれをどの個人にも許さぬように出来ているのではあるまいか……？
そんなことをしきりに考えだしている宗矩だけに、一層強く、家康の言葉が胸に突き立って来たのかも知れない。
「そうじゃ」
と、家康は、飾らぬ表情で頷いた。
「わしはの、今迄は子供の心配でたくさんだと思うていたのじゃ。将軍家のこと、上総介のこと、尾張のこと、遠江中将がこと……ところが、こんど末の伜を水戸へ遣わすことにして、これで終わりと思うたら、そうはゆかぬ。急に竹千代どのの事が気になってならなくなっての」
「それが、それが、自然なのではござりますまいか……兵法でも同じことが申せるように存じまする」
「そこでお許に頼んでおくのじゃ。お許はまだ若い。どうじゃな、お許は、竹千代どのにも兵法を教えることにして、来春の上洛に同行してはくれまいかな」
宗矩は返事の代わりに、黙って家康を仰いでいった。
「何事によらず、師が一代では念がとどかぬ。よいかの欲じゃぞ。迷いじゃぞ。そう思うて聞いてくれよ。わしの不安は底無しになって来ている。そのせいじゃと思うて聞い

てくれよ」
「は……はい」
「よいか。将軍家には将軍家の師、竹千代どのには竹千代どのの師と、師が父子別々では、やがて父子の意志は通わぬ別個の人になりそうで不安なのじゃ。言葉を変えていえば父子の対立。いや対立以上の不和もそこから生まれよう。わしと将軍家が、わずかに怒鳴り合わずに済んだのは、子供のおりには於愛がいた。於愛がわしという父の意志をようわが子の秀忠どのに伝えたから……そして、長じてからは本多正信……これが、又わしの意をよう伝えて誤らなんだ。と申しても、その将軍家でさえ、実はなおわしの方に不安、不満が気ざすのじゃ……」
「……」
「さて、そのわしは遠からず、この世を去る。去ったあとで、今のままでは将軍家と竹千代どのの意志を通わす筧がない。これを作っておいてやらねば、それ、洩る船、焼ける家の不安がいよいよ募るばかりじゃ。どうじゃな、お許は、双方の師としてこの筧の役を勤めてはくれまいかな」
柳生宗矩は、不意に眼頭が熱くなり、やがて涙で、わが膝が見えなくなった。
（年寄りの取り越し苦労……）
そう思おうとするのだが、感情はそれに従おうとしなかった。
（これこそ、まことの愛情、まことの用心……）
そうした感動がぐいぐい胸をしめつける。
「お言葉とあれば不肖宗矩……」
「引き受けて呉れると申すか」
家康はホッと語気の力を抜いて、
「そうなればもう一つじゃ。どうじゃな、将軍家に上総介の処分、出来そうに見えるかな」
家康は、すぐさま次の不安に向きを変えた。

五

「洩る船に坐し、焼ける家の下に臥す……それほどの覚悟で天下にのぞむ者が、わが家に争いの根を残しておいて何の泰平ぞやじゃ」
家康はまた軽くいった。
「争うが繁昌の道か、睦むが繁昌の道かは三ツ児にもわかっていよう。わかっていながら眼をはなすと争いだす……それがこの世の実相ならば、将軍家と上総介の間もまた、争う余地を無くしておくがわしの役目、となるのだが、俗に年寄りの冷水という言葉もあれば、もう一度虚心にこなたの意見を訊いてみたい。どうじゃな、上総介の処分は将軍家に任せておいて大事無いと思うかな？」

柳生宗矩は、
「されば……」
といって、思考をそれにふり向けた。
家康の、この問いの裏には、忠輝をこのままにしておいて、伊達政宗を押えきれようかという意味がふくまれている。
(又、以前の正眼がよいか、大上段がよいかの問に戻っている……)
それがわかると、宗矩にも意見はあった。
「恐れながら、大御所さまは、伊達どのを、どのようなお相手とご覧なされておわしましょうか。双方白刃で向かいあった場合の相手として」
「双方白刃で……と、問い返すのか?」
「恐れ入ってござりまする」
「やはりこれは、恐ろしい相手であろうな」
家康はそういってから、
「そちも申したとおり、政宗は酒乱ではないが、酔狂な男……二人だけで向かい合ったと見せかけて、実は、四方八方へ助太刀を伏せておくやも知れぬ男だ」
「なるほど、そうかも知れませぬ」
「それゆえ、恐ろしいというよりも、油断のならぬ男というた方がよいかの」
「恐れながら、宗矩もそのように存じまする。そこでもう一度、その油断ならぬ伊達どのと、将軍家とが白刃を合わせて立ち向かった……その場面をご想像願わしゅう存じまする」
「なるほど」
「向こうが助太刀を伏せておくやも知れぬ。とすれば、将軍家の側にも、何ぞそれに対するお手当てがなければなりませぬ」
「そうか。すると、やはりわしは、将軍家に助太刀をしてやらねばならぬ事になるか」
宗矩は、相手の反応の若々しさにおどろきながら、
「大御所さまは、何時もそれをなされておわす」
と、笑いながら附け加えた。
「ただ、将軍家お一方ではござりませぬ。泰平を希う諸大名から庶民一人々々の上に、並々ならぬ助太刀をなされておわす。そこにわれ等を否応いわさぬご偉業の重みがあるのだと存じまする」
「そうか。わかった。わかったぞ又右衛門」
こんどは家康が涙ぐんだ。
「そうか。わしの洩る船、焼ける家のあせりを、みなへの助太刀にあせる心と見てくれるか」
「それをせずにはおられぬお方……それゆえ、絶えず動く

そのご配慮……このご配慮一途のご生活こそ、わきから見ればどう動かしようもない大御所さまの不動心」
「動がそのまま不動と申すか」
宗矩は一礼して、
「上総介さまご処分では、将軍家へお助太刀を願わしゅう存じまする」

六

家康は、ふと、秀忠が宗矩にもその旨申しふくめて寄こしたのではあるまいかと思った。
しかし、それでもよかった。
(宗矩の言葉には道理がある。道理には従わねばなるまい)
なるほど、まだ泰平の世に戦国流の権力奪取の「機会――」を求める政宗と、家康の意を奉じて、泰平の基礎固めに心身をすりへらしている将軍秀忠とでは、その個人的な力量に差があり過ぎた。
それを、無理に押える術はなくはない。
「――予の意に逆うのか。予は将軍家なるぞ」
そう一喝してよい「権力――」も「実力――」もすでに将軍家の側にある。
ところが、その権力と実力を軽々に利用すればそれは直ちに「伊達討伐――」という戦乱になり、戦乱になること自体が、泰平のために中央集権をなしとげた家康父子の敗北を意味する結果になる。
(したがって、ここでは、将軍家に助太刀しても、戦乱にしてはなりませぬ)
そう言う宗矩の意見なのだと、家康は受け取った。
「そこ許の意見は、ようわかった」
家康はもう一度言ってから、
「ところで政宗の方じゃが、何と思うて、わざわざあのように、喧嘩腰に出たのであろうかの」
「されば……」
宗矩はわざと笑って首を傾げて、
「兵法で申せば、さぐりの小手振り……かと存じまするが」
「将軍の腕前を、さぐるためと申すか」
「はい。しかもそれは、将軍ご自身の腕前だけではなく、これに助太刀なさる大御所さまのお手の内も……伊達どのは、その双方合わせたものの力量を見きわめねば、わが気性を矯めかねるという……これも大きな迷いの壁につきあたって居られますようで」
「なるほど」
家康は大きく頷いて、改めて又宗矩を見直すのだった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com